

聞き手 外川智恵さん ● 大正大学表現学部准教授

平田 徹さんに聞く

横浜高等学校 教諭、硬式野球部監督



ひらた とおる
横浜高等学校教諭、同校硬式野球部監督。'06国際武道大学体育学部を卒業後、横浜高等学校硬式野球部コーチに就任。'10同校硬式野球部部長、'15から現職。自身も、横浜高校時代に全国高校野球選手権大会に2回出場。3年生の時は主将として、ベスト4に進出。

子ども扱いをしている限り生徒は大人にはならない

外川 本日は、高校野球では全国屈指の強豪校である横浜高校の硬式野球部監督、平田徹さんにお話を伺います。平田さんは横浜高校在校中に2回、甲子園に出場なさって、3年生の時には主将としてベスト4まで進めました。

平田さん、今は夏の甲子園大会へ向けてお忙しい時期でしょうか。

※インタビューは5月26日(金)。

平田 日曜日に春季関東大会から帰ってきたばかりですので、3日間ほど休んで疲れを取って、昨日から練習を再開したところですよ。めりはりが大事だと考えています。

外川 野球に夢中になっている高校生生は3日も休みがあると、何をしたらいいんだろとかとか落ち着かないのではありませんか。

平田 「そろそろ練習をしたい」という気持ちにさせることも、休みをとる狙いの一つ

です。休みがなく疲れも抜けないままに練習をすると効果が上がらないし、けがをすることもある。心身共にリフレッシュさせて、彼らの「野球をやりたい」という気持ちを高めるようにしています。

外川 選手が自発的に動くように仕向けるわけですね。

平田 私はそれをとてども大事にしています。内発的なモチベーションをどれだけ引き出せるか。「好きこそものの上手なれ」といいますが、「やらされる練習」は、効果が上がりません。

外川 なるほど。「やる気」をくすぐるのですね。

平田 私は、「子ども扱いをしている限り、大人にはならない」と思っています。「この子には、まだ無理だ」「この子には、まだ分からない」と決めつけて、「早く起きなさい」「早く寝なさい」と言えば言うほど、いつまでたっても子どものままです。

「少し早いかな」と思っても、相手を信頼

して意識的に大人扱いをすることにより、子どもの心の中に自覚が生まれたり、信頼に込めようという気持ちがわいたりします。実際にはまだ子どもなので期待を裏切られることもあります。その中から、期待を超えて応えてくれる生徒も出てきます。そうすると他の子どもそれについていくという、いいサイクルが始まるがあります。



すぐに結果が出なくても、一生懸命に努力している限り、黙って見守る

外川 平田さんのそうしたお考えは、どの

ようにして形成されたのでしょうか。

平田 大学時代の4年間、野球部の岩井美樹監督にご指導いただいたことが大きいと思います。高校では厳しく指導されましたが、国際武道大学の野球部に入ってみると、「大学生は、こんなに大人扱いされるのか」と驚きました。岩井監督は学生を信頼し、大人扱いをしてくださる。それがうれしくもあり、非常に心地よかったのです。

現在、「自分がこんなふうに扱われたら、気持ちよくプレーができるだろうな」というように、常に自分に置き換えながら生徒に接しています。

外川 確かに、誰かに信頼されると自信が付きますよね。ただ、それは一朝一夕にはいかない。私も大学で教えていますが、手応えを感じた瞬間の積み重ねが、その学生にとってどれほど大事かは、卒業するまでの成長過程で実感します。

平田さんは授業や部活動で密接に生徒と接していらっしゃるわけですから、なおさ

平田 徹さん



ら手応えを感じる瞬間が多くありなのではないでしょうか。

平田 子どもによって、成長するスピードはまちまちなので、じっくり見守ってあげることが大事になってきます。

高校野球は2年数カ月という非常に短い時間しかありませんが、だからといって目の先の結果を追いかけてすぎると、つい手を出したり、口を出したりしてしまいがちです。しかし、そうすると生徒の主体性を育んだり自立につなげるということが難しい。すぐに結果が出なくとも、本人が一生懸命に努力している限りは、黙って見守り続ける。

もがくうちに、自分できつかけをつかんだり、結果を出し始めるということがあります。その時にすかさず褒める。このようなことを大事にしています。

外川 それが、平田さんの教育者としての理念とか信念といったところでしょうか。

平田 そうですね。高校野球の指導者は誰しも、選手を上達させたいと思っていますが、その思いが強すぎると、指導に力が入りすぎたり、口うるさくなってしまうがちです。その結果、選手がイップス（精神的な理由でうまくプレーできなくなること）になったり、最悪の場合は野球が嫌いになってしまうこともある。そうならないよう、目先の結果を求めすぎないで見守り、必要なタイミングで最低限のアドバイスをしたり、激励したり、苦言を呈したりといったことを心掛けています。

**あくまでも高校の課外授業であり
生徒の成長を主眼に指導している**

外川 ところで、高校野球の名門校の監督というお立場にあって、外部から寄せられる期待も大きいのではないのでしょうか。

平田 甲子園というのは国民的行事と云っていると思いますし、横浜高校野球部ということの重圧は痛いほど感じています。

ただし、忘れてはいけないのは「たかが野球、されど野球」ということ。あくまでも高校の課外授業であり、主役は生徒であつて、大事なのは生徒をきちんと指導することです。周りからの期待や外野の声にとらわれすぎると、生徒に対する指導がおろそかになってしまうでしょう。生徒のほうをしっかりと向いて、生徒の成長に主眼を置いて指導していくという軸足がぶれなければ、プレッシャーに押しつぶされることもないと思っています。

同じ目標に向かって、生徒と一緒に戦っていくわけですから、日々力を合わせ、成長することを目指して頑張っていると、プレッシャーから来る孤独感のようなものを

忘れさせてくれます。つくづく、生徒が財産だと思います。

外川 いまのお話を伺って、私は親としても安心しました。教育現場には時折、生徒よりもまず自分の評価を考える方もいらっしゃいます。平田さんは生徒の成長を重視されるんですね。

平田 評価ということでは、スポーツという世界で勝利に向かって命がけで戦うところに本音の教育があり、いつ辞めてもいいという腹のくくり方ができていないのであれば、指導者という立場は引き受けるべきでないという気持ちでやっています。

生徒には泥臭く向き合い、 彼らの成長に立ち会っていききたい

外川 勝負では、意思を決定しなければならぬ場面に遭遇します。また、ぜひ勝ち取りたいとか、負けたと感じる瞬間など心の葛藤が少なからずあると思います。平田さんは、野球という世界を長く経験なさっ

てきたからこそ、見えてきたものがおありなのではないでしょうか。

平田 高校野球は、プロではないので負けてもいいと思います。また、高校野球の2年数カ月という短い間に、こちらの考えが全て彼らに浸透するとは思っていません。しかし、在校中には分からなくても、10年後、20年後に、「あの時、監督はこういうことを言いたかったのか。いまになって、身に染みる」ということがあってもいいと思います。

まだ10代の若者ですから、失敗しても負けても、それが糧となって次のステップに進むことができればいいと思います。私は、グラウンドで過ごす日々を大事にしながら、生徒には泥臭く向き合い、彼らの成長に立ち会っていききたいのであって、試行錯誤しながらでも、より正しい方向へ進んで行くことができれば、結果は自ずと付いてくるでしょう。

外川 生徒の未来を考えていらっしゃるの

ですね。2015年の監督就任から一貫してその姿勢で臨まれたわけですね。順調でしたか。

平田 いろいろありましたね。表に出せないような苦しいこともたくさんありましたが、スタッフの協力や選手の頑張りのおかげで、監督1年目で甲子園に行くことができました。ある程度は結果が伴いつつあるし、グラウンドでは非常に手応えを感じることがあるので、やりがいと充実感を感じ、感謝しています。

外川 では、監督としての今後の展望をお聞かせいただけますでしょうか。



外川智恵さん

平田 たくさんの生徒が野球部の門をたたくてくれるので、野球の上手下手にかかわらず、生徒が持っている可能性を余すところなく伸ばしてやり、ゲームの中でそれを思い切り発揮できるようなチームづくりをしていきたいですね。

甲子園を目指して真剣に勝負をするところに、本音の教育がある

外川 平田さんの野球人生も聞かせてください。野球を始めたきっかけは何だったのですか。

平田 物心がついた時には野球少年でした。幼稚園の頃です。同居していた祖父が野球をやっていたので、キャッチボールの相手をしてくれました。それが野球を始めたきっかけのような気がします。

外川 平田さんよりもっと上の世代に人気のあったマンガの「巨人の星」では、父親が息子に厳しい特訓をしていました。そういう世界で育ったのですか。

平田 むしろ、正反対です。祖父には一度も叱られたことがなかったのです。優しい祖父と毎日、家の前の道路で楽しくキャッチボールをしていたので、野球が好きになっていったのだと思います。

外川 幼少から野球と一緒に歩んで来られて、これが自分の職業になると自覚なされた瞬間はございますか。

平田 大学在学中にいろいろ経験する中で、高校野球の指導という方向に徐々に導かれていった気がします。強いて挙げれば、母校である横浜高校から「戻ってきて、手伝え」と声を掛けていただいた時でしょうか。

ただし、私は野球で生活しているのではなく、教員として高校生を指導している、高校の教員という職業に就いているという感覚だけは失わないようにしています。

外川 そうすると、平田さんにとって野球はどういう位置付けになるのでしょうか。

平田 甲子園を目指して真剣に勝負をするところに、本音の教育があると思います。

スポーツほど勝ち負けが明確に分かれるものは、あまりない。まず、メンバーに選ばれるかどうか、チーム内で明暗が分かれるし、試合が終わった時には曖昧なものは一切なく、勝者と敗者しかいません。そうした厳しい勝負の世界に、高校生を成長させる本音の教育があって、大人が本気になって取り組み、高校生を指導していく。そこに、教室の中だけでは得られないものがあると感じています。

横浜高校に進学を決意した時の15歳の男の志を忘れるな

外川 お話を伺っていると、平田さんは生徒を叱ることがないような気がします。

平田 そんなことはありません(笑)。彼らを信じて見守り、我慢しながら待ち続ける。だから、それを裏切った時は怒ります。

外川 なるほど。こういうことをしてはいけないという、警告のようなことでしょうか。
平田 そうですね。私は、結果に向かって

努力する姿勢を求めているわけです。安易に他人に頼るのではなく、自分で創意工夫して、試行錯誤をする。そうやって生徒がもがいたり苦しんだりしている時間に、実は一番成長をしています。それが分かっているから、こちらも見えぬふりをしている。頑張っている限り、試合でどんなに結果が出なくても、私は絶対に怒りません。

結果が伴っていないのにもかかわらず、自分の立場は安泰だと勘違いして安穩としていたり、向上心を失って努力がおろそかになったりした場合は、厳しく突き放したり、時には練習に参加させない、つまり野球を取り上げてしまうこともあります。

外川 それは、本当に共感します。学生を見ていると、こんなに恵まれた環境で、「やっていいよ」と言われているのに、なぜ手を伸ばしてつかみ取ろうとしないんだろうと思うことがあります。自分が恵まれた環境にいるということにどうやって気付かせるか、四六時中考えています。

平田 おっしゃる通りだと思います。私はよく、「小学生くらいで野球を始めた頃の、野球少年の心を持ち続けろ」と言っています。そして、「横浜高校に進学を決意した時の、15歳の男の志を忘れるな」。「俺は横浜高校へ進学し、野球選手として名を成すんだ」という気持ちを、いつ忘れたのか」と言います。親の期待が大きすぎたり、指導者が怖いと、いつの間にか「今日一日、いかにして監督やコーチにみつからないようにさばるか」ということばかり考えてしまう。しか



し、好きな野球を思い切りやらせてもらえないじゃないか。それぞれ上手下手はあるし、メンバーに入れるかどうかという当落線上の部員や、それがほとんど無理な部員もいるけれど、それぞれの立場で自分を高めるように精いっぱい頑張ろうと言っています。

外川 ちなみに、平田さんは野球少年の頃の気持ちを持ち続けていらつしやいますか。

平田 はい。生徒を指導するということは、絶対にごまかしがきけません。生徒は、「この人は口だけだな」ということが本能的に分かる。この大人が信頼できるかどうかという判断力は、本当に鋭い。だから、私自身もユニホームを着てグラウンドに立つということをワクワクした気持ちで楽しみたいと思っています。まず私が率先してできなかったら、それを彼らに求めるのは無理だと思うので、いつも心掛けています。

外川 平田さんが横浜高校に進学しようとした決意をなさった時のお気持ちを聞かせください。

平田 中学時代、私は有名選手でも何でもありませんでした。しかし、中学3年の時に横浜高校の松坂大輔投手が甲子園で活躍し、春夏連覇したのを見て、勝手に運命を感じて「俺はここへ行く」と決めました。

周りからは笑われたりばかにされたりしましたが、自分の意志を貫く力があつたというか、おめでたかったというか。不思議な縁を感じ、吸い寄せられるようにして横浜高校を志望しました。

外川 そして、横浜高校を卒業して国際武道大学へ進学し、実力のある選手がたくさんいた硬式野球部に入部なさいました。

平田 野球部には岩井美樹監督という本当に素晴らしい指導者がいらっしやるので、ぜひ指導を仰ぎたいとか、高校の時に慕っていた先輩が野球部にいたという理由から、もう4年間、野球を頑張ってみようと思ひ、国際武道大学に進学しました。

外川 大学時代を振り返ってみて、いかがですか。

平田 皆さんおっしゃると思うのですが、もともと勉強しておけばよかったと思います。なぜ、大人になってから気が付くのでしょうかね(笑)。「4年間、しっかりと勉強したほうが絶対にいい」という現在の気持ちで、もういちどあの年代をやり直したいくらいです。

選手を「この人の期待に応えたい」という気持ちにさせる監督になりたい

平田 大学で岩井監督の下で野球をしたことが、いま本当に生きています。指導する立場になってみて、岩井監督の影響が私の中に息づいていることに気が付きました。

外川 具体的には、どのようなことが一番大きかったですか。

平田 それまで、野球部の監督、つまり指導者たるものは選手を厳格に管理しなくてはいけないと思っていました。チームの勝利のために、チームが求める選手像に変えていってチームを作り上げるという感覚が、私の中にありました。

しかし、岩井監督の野球は「まず選手の個性ありき」なのです。バッターなら、遠くへ飛ばす力がある選手は、その力をとことん伸ばすよう指導する。足が速い選手は、その速さを生かす方向へ特化させていく。そうして、選手の個性を伸ばし、各分野のエキスパートとして育てながら、まるでバズルのピースをはめ込んでいくように一つのチームとしてまとめ上げていくのです。

だから、選手それぞれがチーム内に居場所があり、居心地がいい。苦手な分野に煩わされることなく、思い切りプレーできる。それが、岩井監督のチームづくりでした。

外川 なるほど。野球という「方法」を使いながら、自分の特長を見つけるように指導して、自信をもたせるのですね。

平田 そうですね。細かい規則や罰則があつて何かを強制されるわけではなく、自分のほうから「もつと期待に応えたい」とか「どうやったら自分の個性を伸ばして、いい方向へ進んでいけるだろうか」と考えること

ができるようになったのです。

外川 それは素晴らしいご指導ですね。そうやって、平田さんは捕手としての才能を見いだされたのですね。

平田 実は、私が4年生の時に、同じポジションで私より実力が上ではないかと思う選手が3年生にいました。しかし、監督は私を使い続けてくれたのです。私は、自分を使ってくれる監督に対して意気に感じる場所があり、「この人の期待に応えたい」という気持ちにさせる方でした。

私はまだそういうレベルに至りませんが、選手たちが「この監督に育ててもらった。何とか期待に応えたい。監督を胸上げして、恩返ししたい」と思われるような指導者に、いつかなりたいと思います。

鳥肌が立つようなことや、涙がこぼれるほどうれしいことがたくさんある

外川 ところで、終始穏やかにお話くださいましたが、高校生にとってはどんな監督

なのか気になりました。怖いですか。

平田 怖い存在でなければいけないという面もあるとは思いますが、監督の顔色をうかがわないで野球をやる状態にすることが理想ではあります。

外川 怖さにもいろいろな意味がありますよね。ちなみに、岩井監督にも怖さや威厳をお感じになったことはありますか。

平田 私は4年間、岩井監督に叱られたことがほとんどありません。しかし、心から尊敬する相手に対しては、こちらも自然と居住まいを正しますよね。



平田徹さん(右)と外川智恵さん
(2017年5月26日 横浜高等学校
長浜グラウンド・監督室にて)

厳しく管理する鬼教官タイプの指導者に対しては、選手たちも本人の前では緊張するものの、いなくなるとだめになることが多い。それでは信頼関係が築けないし、真の指導とは言えません。生徒との距離感の取り方は難しい。遠いと彼らの本音が見えないし、縮めすぎると「なあなあ」になってしまうわけです。

外川 指導者って難しいですね。では最後に、これまでの野球人生の中で、一番うれしかったことを聞かせてください。

平田 監督をしていると、鳥肌が立つようなことや、思わず涙がこぼれるほどうれしいことがたくさんあります。高校生ですから、選手は毎年入れ替わりますが、選手との感動のエピソードも毎年たくさんあって、一つだけ挙げることはできません。それくらい、指導者とか教員という仕事は魅力があると思います。

外川 本日は素晴らしいお話をありがとうございました。